

***SEEING THE BIG PICTURE***  
***Exploring American Cultures on Film***

Ellen Summerfield · Sandra Lee 著 (2001)

Intercultural Press, Inc. 222pp.

花光 里香  
早稲田大学

授業にどんな教材を使ってほしいかと学生に聞くと、返ってくる答えの中には必ず「映画」がある。それは、英語の授業でも、異文化コミュニケーションの授業でも同じである。それではどんな映画がいいかと尋ねると、実際に映画をよく観る学生は意外に少ないことに気づく。

口語表現の学習、歴史や生活文化への理解など、映画は外国語や異文化コミュニケーションを含む多くの教育現場にさまざまな可能性を与えてくれる。その一方で、映画を教材に授業をするには準備に長い時間と多くの労力が必要とされるだけでなく、授業時間の制約もある。映画を授業に使いたくても、なかなか使えないのが教員の正直な気持ちではないだろうか。

このような学生と教員のニーズに応じてくれるのが、*To the Students* で始まり *To the Instructor* で締めくくられる本書である。映画を通して多様なアメリカ文化を紹介するとともに、今までとは異なる観点から映画を観ることを教えてくれるこの本は、英語教育や異文化理解教育に携わる私たちに限りない授業へのヒントを与えてくれる。

最初の章である *To the Students* では、*Why American Cultures?* という疑問を学生に投げかけ、もはや *culture* ではなく *cultures* となったアメリカ文化の多様性を学ぶ大切さを説き、新しい視点で映画を観ることを提案する。また、文化と映画に関して知っておくべき単語がわかりやすく解説され、映画を観た後に行うディスカッションのポイントまで押さえてあり、学生への細かい配慮がうかがわれる。

次の8つの章では、それぞれ1, 2本の映画を通して下記の8つの文化を学べるようになっている。*Mainstream White Culture* に関しては、映画をリストの中から選択できるようになっているので、日本でも話題になった作品を例に挙げておく。[ ] 内は邦題, ( ) 内はアメリカでの公開年である。

## Native American Culture

Dances with Wolves [ダンス・ウィズ・ウルブス] (1990)

Thunderheart [サンダーハート] (1992)

## African American Culture

The Long Walk Home [ロング・ウォーク・ホーム] (1991)

## Chinese American Culture

The Joy Luck Club [ジョイ・ラック・クラブ] (1993)

## Japanese American Culture

Come See the Paradise [愛と哀しみの旅路] (1991)

## Mexican American Culture

Lone Star [真実の囁き] (1996)

## Mainstream White Culture

Angela's Ashes [アンジェラの灰] (1999)

Apollo 13 [アポロ 13] (1995)

Kramer vs. Kramer [クレマー・クレマー] (1979)

A River Runs Through It [リバー・ランズ・スルー・イット] (1992)

Rocky [ロッキー] (1976)

Stand by Me [スタンド・バイ・ミー] (1986)

What's Eating Gilbert Grape [ギルバート・グレイブ] (1993) 他

## Gay Culture

The Wedding Banquet [ウェディング・バンケット] (1993)

## Deaf Culture

Children of a Lesser God [愛は静けさの中に] (1986)

“The book is instructor-friendly, and the units require no additional preparation.” と裏表紙に評されるほど、8つの章は実に親切に構成されている。各章は、映画のテーマに関する写真や原作者の言葉などを通して、自由に書いたりディスカッションをする活動から始まる。そして、映画の歴史的背景やテーマに関する単語を解説した後、監督や俳優、ストーリーなど映画そのものの説明に入る。登場人物が多く人間関係が複雑な場合、学生が混同しないよう登場人物の相関図を完成させるタスクまでついている。その後は、新聞記事や監督へのインタビュー、詩などを通して、文化とコミュニケーションについて学ぶページが続く。次に、実際に学生が映画のテーマに関して調査を行ったり、リサーチペーパーやプレゼンテーションに取り組めるよう具体的なトピックをいくつも与え、学生の興味をテーマに引きつける。さらに、映画の登場人物になりきって詩を書く、映画の続編を

考えるなど、想像力を養う活動が用意されている。実はこの想像力の育成は、特に異文化を学ぶ際にとっても重要なことである。自分と異なる文化を持つ人がどのような立場に置かれ、何を考えどのように感じているかを知るには、実際に体験できること以外は想像するより他に方法はないからだ。章の最後には、推薦図書と映画のリストに加え、ウェブサイトなどさらなる学習のためにさまざまな情報が掲載されている。

8つの章の後、学生が学んだことを振り返りこれからにつなげる活動が用意され、*To the Instructor* で本書は締めくくられる。本書の意図や使い方の説明に加え、授業計画のサンプルや学生の自己評価用紙までついている。もちろん、カリキュラムが異なる日本でそのまま使うことはできないが、十分参考になる。そして、「よくある質問」に丁寧に答えた後、最後に教員用の参考文献や映画などのリストが添えられている。本書の魅力は *instructor-friendly* であるだけでなく、新聞や雑誌の記事、映画評、インタビュー、原作、漫画、詩、絵、写真などをバランスよく取り入れているところにある。また、非常にわかりやすい英語で書かれ、年齢や言語文化背景の異なる学生に幅広く対応できる。さらに、アメリカ研究、ESL(本書は TOEFL [PBT] 500 以上であれば問題ないとしている)、映画、コミュニケーション、歴史、人類学など、専門分野の異なる学生が共に学べるように工夫されている。さまざまな境界線を超えて各章のテーマに迫ろうとする姿勢は、ボーダレス時代における英語教育と異文化理解教育の教材にふさわしい。

ところで、今ではアメリカで *Come See the Paradise* [愛と哀しみの旅路] (1991) を手に入れることは難しいという。毎年多くの映画が製作される中、残念ながら姿を消していく優れた作品も少なくない。そのような理由から、本書の改訂版がミシガン大学出版から近々刊行されるという情報を著者から直接得た。*Japanese American Culture* の章がなくなるのは残念だが、新しく *Irish American Culture* が *Far and Away* [遙かなる大地へ] (1992) を軸に語られる。また、アメリカ社会において早急に理解が望まれる *Muslim American Culture* が加わり、*House of Sand and Fog* [砂と霧の家] (2003) などの映画が含まれている。本書に引き続き、ぜひ参考にさせていただきたい。

また、日本を含むさまざまな国で制作された映画や教育目的で作られた映画に興味のある方は、*Summerfield, E. (1993). Crossing cultures through film. Yarmouth, ME: Intercultural Press, Inc.* を参照されたい。

最後に、同じ映画を研究する者として一言つけ加えたい。授業に使える映画を1本見つけるためには、何十本もの映画を観なければならない。見つけた後には、実際にその映画を用いて授業を展開するまでに、学生からのフィードバックを含め長い準備期間が必要である。本書は、かたちになる前に気が遠くなるような作業を経ているはずだ。著者への尊敬の念と感謝の気持ちをこめて、薦めたい一冊である。